

Eureka XIII

六年制通信 No.40 令和8年3月19日(金)号

回り道礼賛

文科省が「ゆとり教育」を推進したのはもう三十年以上も前でしょうか。円周率は3でいい、といったところにスポットが当たりすぎたきらいはありますが、世間では結局不評でしたね。しかし、この「ゆとり教育」あるいは教育における「ゆとり」ということについては、私は非常に肯定的な印象を持っています。ただし、私の抱くプラスのイメージは言葉から勝手に考えていたもので、文科省が「詰め込み教育」の反対命題（アンチテーゼ）として設定した「ゆとり教育」とは別物です。

私の考える、教育における「ゆとり」とは、基本的な勉強はもちろん懸命にするわけですが、実は勉強はすればするほど疑問が出てくるもので、そういう疑問も解決していく、つまり本筋の勉強を離れて回り道をすると言ったらいいでしょうか、授業における雑談の持つ道草の意味合いですね。

文系・理系という分け方はあまり意味がないと思いますが、少なくとも文学においてはこういう回り道は絶対に必要です。言葉の勉強でもそうですね。英語がわかるとかわからないとか言っていますが、結局様々な内容が「英語で」書いてあるだけなので内容に対する理解がなければ英語だろうと日本語だろうと読めません。英単語を覚え文法を理解しても内容、そして背景知識がないと何も読めません。知識がないのか英語がわからないのか、よくごちゃ混ぜに考えられているように思います。

文学では、例えば本居宣長の「敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山桜花」など、朝日に色が染まっていく山桜を実際に見て見ないと、この歌を鑑賞したことにはなりません。それで時間をとって朝早く吉野に見に行く。ついでに山桜の種類とか、昔はどこに苗園があったのかを調べてみる。それが私の考える「ゆとり」です。芭蕉の「初しぐれ猿も小蓑をほしげ也」でもそうです。初冬の初しぐれが如何に冷たいものか、芭蕉の生きた1600年代でも今と同じような気象状況で、同じように冷たいのか、それらを調べてみるのも意味のある回り道です。西洋古典の世界でも紀元前八世紀に完成したと言われるホメロスの『オデュッセイア』にはたびたび「ぶどう酒色の海」という表現が出てきます。ホメロスはエーゲ海に面した小アジア側の出身ですから、恐らく彼の見た海はエーゲ海でしょう。そもそも当時のぶどう酒はどんな色をしていたのか。何をどう調べればわかるのか。もちろんホメロスだけを読んでいてもわかりません。道草をしながら回り道をするくらいの「ゆとり」が必要です。本来の勉強とは、しかし、こういうものであるべきではないか。私が「ゆとり教育」という言葉からイメージしたのもこれです。もちろん基本的勉強は十分に行った上の「ゆとり」ですよ。

春休みのおすすめ

・住野よる 『また、同じ夢を見ていた』 (双葉社)

私はこの本で **under the rose** という表現を知りました。元はラテン語で、その昔、バラは秘密の象徴だったとのこと。She told me about it under the rose. (彼女は内緒で話をしてくれた) なんて知らなかったなあ。

住野さんは『君の臍臓がたべたい』でデビューされたそうです。私は、これは映画を観ました。あれ、ラスト、もう少し何とかできなかったのか、と思ったけど。

今回は小柳奈ノ花という小学生が主人公。たくさん本を読み、自分を賢いと思っている。したがってと言うべきか、クラスメイト (特に男子) をバカにしている。口癖は「人生とは…」。「人生はプリンみたいなものね」→「甘いところだけで美味しいのに、苦いところをありがたがる人もいる」、こんなのが口癖の小学生。学校で「幸せとは何か」という課題が出され、考えるペアが絵の上手い桐生君。この桐生君があることでクラスメイトにいじめられ、助けた小柳はみんなから無視されてしまう。

実はまだこの物語の肝心なことは何一つ書いていません。この物語、タイトルを思い返しながらかいて読んでみてください。奈ノ花の友だちの、尻尾のちぎれた「ナー」と鳴く猫。奈ノ花が出会うアバズレさん、南さん、おばあちゃん。彼女たちは一体誰なのか。私は途中から「バタフライエフェクト」という映画を思い起こしていました。選ぶことのなかったもう一つの人生を何度も経験する物語ですよ。あの映画は傑作でした。この本を読んだら「バタフライエフェクト」も観てください。

・三浦しをん 『神去なあなあ日常』 (徳間文庫)

この人の『舟を編む』は我が人生の金字塔なのですが、『神去なあなあ日常』も面白かったよ。手に取る前は林業がテーマということで、たいして興味がわかなかったのですが、文庫本 14 ページ 4 行目以降にこうあるんだなあ。「名古屋で新幹線を降りた俺は、近鉄に乗り換えて松阪まで行き、そこから聞いたこともないローカル線に揺られて、山の奥へ奥へと入っていった」、いかがです、ものすごく親近感がわきませんか。ローカル線とはあれのことかな、とか、舞台の神去村のモデルはあそこかな、とか。本文に出てくる方言もわかるしね。そう言えば思い出した。京都で学生時代を過ごしたのですが、私の学科の主任教授がたまたま伊勢の方でね、それで私が三重県から来たことを知ると先輩たちが一斉に「じゃあ野田君も、納豆しよう納豆しようって言うの?」「は?なんですかそれ?納豆がどうかしました?」てな頓珍漢な会話があって、ああ「どうしようかな」というとき「なっとしよかな」というなあ、それを先輩たちが変なイントネーションで言うから私には納豆に聞こえた、というわけ。本文にも「なっともならんのお」が出てきます。この物語、著者は巻末に様々なところ、あるいは個人から山に関する話を聞いた謝辞を述べています。さもありません。非常に生き生きと林業に従事する人々の姿が描かれています。山に生き山に死ぬことを当然のこととして日常を生きる人々。そして村人たちが神去村の山には神様がいることを当たり前信じていることも素敵でした。では諸君、また来年度ね。

BGM は Michael Jackson の *Ben* でした…。